RYD 株式会社

ことばの先生 初級編　目次

予備知識

1　幼児期のことばの成長・・・・・・・・・・・・・・・・・１
2　幼児期の発音の成長・・・・・・・・・・・・・・・・・・９

ことばのトレーニングを始めよう

1　ことばのトレーニングを始める前に・・・・・・・・・・１７
2　トレーニング課題の全体像を見てみましょう・・・・・２０
3　トレーニング①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
4　トレーニング②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
5　トレーニング③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
6　トレーニング④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
7　トレーニング⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７
8　評価方法まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４２

保護者様への対応

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
1　基本的に聞き役に徹する・・・・・・・・・・・・・・・４５
2　言葉を慎重に選ぶ・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６
3　保護者が理解できる言葉を使って説明する・・・・・・４７
4　整理して伝える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７



中野式言語療法監修

予備知識　幼児期のことばの成長 1

▶職員と言語聴覚士の会話を読んでから解説ビデオを見てみましょう



言語聴覚士・中野



職員

中野先生！！聞いてください！先日、児童発達支援事業所での就職が決まり、来月から職員として働くことになりました。





おめでとうございます。楽しみですね！

その事業所で、私は子どもたちに「ことば」を教えることになったので、幼児期の言葉の成長について学ぼうと思っていますが、何から勉強すれば良いか正直悩んでます・・





そうなのですね。では、私と一緒に、学んでいきましょう。

よろしくお願いします。





早速ですが、まずは、ことばの成長について少し考えてみましょう。人は一生のうちで、様々な言葉を学び続けていきます。子供も大人も、もちろん高齢の方でも、日々沢山の新しい言葉を学んでいきますよね。

はい。うちのおじいちゃんも、最近スマートフォンを買ったみたいで、新しい言葉・横文字なんかも、どんどん使いこなしています（笑）





では人が一生のうちで、最も言葉を吸収できる時期は、いつ頃だと思いますか？



えーっと、若い人のほうが、たくさん吸収しそうなので・・・１７歳くらいですか？



答えは０～９歳前後です。



そんな小さい時期なのですね！！！驚きました。



そうなのです。一生のうちで最も急速に言葉を吸収する時期は０～９歳前後であるといわれています。ですからこの時期の『言葉の学び』は、その後の学習面や生活面、情緒面にまで影響を及ぼすといっても過言ではありません。それはさておき、この０～９歳の時期の言葉の成長には〝順序性がある〟といわれています。



言葉の成長に〝順序性がある〟ということですね。なんとなくわかりました。でもそれって、つまりは、どういうことなのですか？



『ことばの成長に〝順序性がある〟』というのは、つまり、『ことばの成長には、決まった順番がある』ということです。例えるなら、階段を一段ずつのぼる時のように１段階ずつ決まった順番を経て成長していくということです。具体的には【１段目】最初はお母さんを見て「ママ」と単語が言えるようになる【２段目】その次に文章で「ママ　あっち　いった」のように話せるようになる【３段目】そして次は会話ができるようになる。のようにそれぞれの段階を１つ１つクリアしていきながら、次の段階に進んでいくというイメージです。



確かに、まるで階段のようですね。その成長の順番は、どのような子供でも共通しているということですか？



基本的にはどのようなお子さんであっても、この成長の順番は大きく変わりません。だから、この階段を二段飛ばしたり、逆に降りたりということは、通常はありません。着実に１段ずつのぼっていくイメージですね。



なるほど！〝ことばの成長の順序性〟について理解できました。 ではなぜ、同じ年齢でも、言葉がすぐにでてくるお子さんと、言葉が遅れてしまうお子さんがいるのでしょうか？



子どもの発達（成長）の速度には個人差があります。これは言葉の面に限らず、運動の能力、認知機能（考えたり、理解したりする能力）に関しても同じです。例えば運動面の成長の例を出しますと、はいはいが、生後 8 ヶ月でできる赤ちゃんもいれば、生後 11 ヶ月でできるようになる赤ちゃんもいます。階段をのぼる速度が人それぞれ違うのと同じように、人それぞれに成長の速度にも個人差があるということです。ただこれは早いから良い、ゆっくりだから悪いといったものではありません。ですので、ことばの面に限らず、幼児の発達（成長）について、ある一時期の状態だけをみて、平均より早い平均よりゆっくりというように比較してもあまり意味がないのです。例えば３歳の時点でことばの成長が平均よりも大幅に遅れていても、適切なトレーニングを継続する中で言葉の遅れを取り戻し、さらに平均以上の段階へと到達するお子さんも実際にいらっしゃいます。

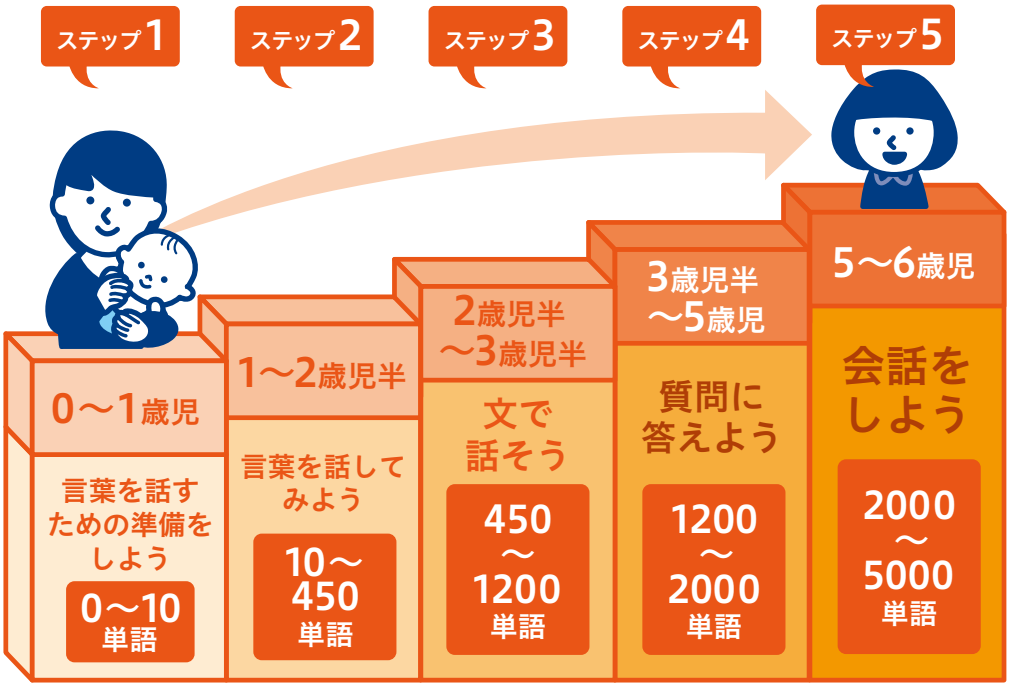


なるほど、幼児期のお子さんは無限の可能性を秘めているということですね 。



その通りです。では言葉の成長について、さらに詳しく見ていきましょう。

予備知識　幼児期のことばの成長２



▶解説ビデオを見ながらテキストを確認していきましょう。

ステップ1 ことばを話すための準備をしよう

概要

※定型発達では０～１歳児に相当する言葉の成長段階です。具体的なことばを話すための準備をしている時期といえます。

「あーうー」「ばばば」「まんまん」「ばだばだ」など、意味のない発声が成長に従って増え始め、それらが徐々に意味のある言葉（母親を見て「ママ」犬を指差して「ワンワン」など）へと変化していきます。

この段階では、話すことのできる（意味の伴った）単語は0～10 語程度です。

※『定型発達』とは発達障害ではない人の成長のこと



言語・コミュニケーション能力

- 指差しを理解できる（親や先生が指さした方向を見ることができる）
- 指さしができる
  （周りの人に注目してほしいものがある場合、そのものの方向を指さしして、伝えることができる）
- 相手から「ちょうだい」と求められると自分の持っている物をわたすことができる
- 自分の名前を呼ばれると反応する（振り返る・遊びをやめるなど）
- 聞いて正しいものを選ぶことができる
  （例　複数の動物が登場する絵本を見ながら、母親が「ウサギさんはどれ？」と声かけすると、
  ウサギの絵を指さすことが出来る など）
- 大人の動作を真似できる
  （大人が手を叩くと真似をして手を叩くことができる、
  大人がバイバイをすると手を振り返すことができる など）
- 大人の声を真似できる
  （大人が「イー」と言うと、その声を真似して「イー」と言える。
  大人が「ババババ」と言うと、その声を真似して「ババババ」と言える など）

ステップ2 ことばを話してみよう

概要

定型発達では１～２歳半の児に相当する言葉の成長段階です。意味のある言葉を話すことができ始め、話せる単語の数が 10～450 語ほどになり、話せる言葉、理解できる言葉が爆発的に増える時期です。
ステップ１～ステップ５の中で最も言葉の成長が著しい時期です。

この段階の言語・コミュニケーション能力

●意味のある言葉（単語）を話し始め、徐々に色々な物の名前が言えるようになる
（初めて発することが出来る意味のある言葉は「ママ」「パパ」「ブーブ（車）」「アンパンマン」など、唇を使う音で、なおかつ反復する（繰り返す）音からつくられた単語が多い）

●動作を表す言葉（「たべる」「のむ」「ねる」「いく」）などが言えるようになる

●「これ」「ここ」「こっち」など人や物を指し示す語（代名詞）が言えるようになる

ステップ3 文で話そう

概要

定型発達の２歳半～３歳半の幼児が到達する言葉の成長段階です。
ことば（単語）と、ことば（単語）をつなげて、短い文を話せるようになります。
話せることばの数は 450 語～1200 語ほどとなり、文法能力が発達し始める時期です。

言語・コミュニケーション能力

●自分から「これは何？」と質問ができる

●２語以上の単語を組み合わせて、文を話せるようになる
（２つの単語を組み合わせた文（例「ママ あっち」「ごはん 食べる」「おおきい くるま」など）や、
３つの単語を組み合わせた文（例「パパ あっち いった」「ライオン おにく たべた」
「ママの おおきい くつ」など）を話すことが出来る。）

●状態をあらわすことば(形容詞・形容動詞)が言える
（「長い」「あつい」「きれい」など）

ステップ4 質問に答えよう

概要

定型発達の３歳半～５歳児が到達する言葉の成長段階です。複雑な会話表現を理解し始めます。尋ねられた事柄に対して答えることができたり、簡単な説明ができたりする時期です。話せることばの数は 1200 語～2000 語ほどになり、文字に興味を持ち始めます。

言語・コミュニケーション能力

- ４語以上単語を組み合わせて文を話せる
  （「パパ　おおきい　くるま　のる」など）
- 簡単な質問に答えることができる
  （ 例「お家の鍵を閉めるのを忘れたらどうなる？」→「どろぼうが はいっちゃう」）
- 簡単な説明ができる
  （例「病院って何をするところ？」→「びょうきになったらいくところ」）
- 表情、感情を理解できる
  （喜び、悲しみ、怒り、驚きなど）

ステップ5 会話をしよう

概要

定型発達の５～６歳児が到達する言葉の成長段階です。物語のあらすじを順番にお話ししたり、自分の経験を思い出して、伝えることができます。
話せることばの数は 2000 語～5000 語ほどとなり、文字（ひらがな）を読めるようになっていきます。両親やお友達との話し合いを始める時期です。

言語・コミュニケーション能力

●他者と対話ができる（会話のキャッチボールができる）

●きいたことがある物語（〝ももたろう〟〝きんのおのぎんのおの〟など起承転結のある物語）のあらすじについて、順を追って説明できる

●感想が言える（「たのしかった」「むずかしかった」など）

●「だれが～？」「なにが～？」「いつ～？」「どこで～？」と訪ねられて、それぞれに正しく応じる事ができる（自分が経験した出来事について「いつボール遊びしたの？」→「きのう　ボールあそびしたよ」「どこでボール遊びしたの？」→「こうえんでボールあそびした」のように答えることができる ）

●文章の中で、～が・～に・～を・～のなど（格助詞）が正しく使える（例「パパが、おおきいくるまにのる」）

●しりとり遊びができる

注意事項

１～５の各ステップごとに、定型発達での到達年齢を記載していますが、これは全てのお子さんが、定型発達児と同じように、この年齢でこれができなければいけない。ということをあらわしているわけではありません。あくまでも目安として定型発達児の成長をあらわしたものとなります。そのため、ことばの先生に必要なのは、ステップ１からステップ５まで言葉の成長の流れを捉えておくことです。

予備知識　幼児期の発音の成長 1



中野先生、事業所での仕事にも少しずつ慣れてきました。子供たちの成長をお手伝いできることに、やりがいを感じています。毎日たのしいですよ。



お疲れ様です。たのしくお仕事をされているようで、私も嬉しく思います。



ところで、利用されているお子さんのことで、いくつか質問があるのですが・・・



はい、どうされましたか？



担当している４歳児さんのことなのですが、私の言うことをしっかり聴いてくれていますし、声かけの内容も正しく理解してくれています。そのお子さんからも積極的に、たくさんお話ししてくれます。ただ、滑舌が悪くて、話の内容を詳しく聞き取ることができないのです。



それは、困りましたね。本人さんにとっても、いくら沢山話しても、滑舌が原因で自分の伝えたいことが、相手に伝わらないとなると、ストレスがたまりますよね。



そうなんです。一所懸命、お話ししてくれているのに私たち職員が聞き取ってあげることができなくて、もどかしい気持ちになります。



そのお子さんのように、滑舌の問題で、きれいに発音することが難しく、周りの人が聞き取りにくい状態を〝構音の不明瞭〟といいます。このテキストでは〝発音の誤り〟とします。



なぜ、このお子さんのように〝発音の誤り〟が生じてしまうのでしょうか？



様々な理由が考えられますので、そのお子さんについては、今の話だけではなんとも言えませんが、一般的には４つのうちのいずれかが原因で〝発音の誤り〟が生じると言われています。①『麻痺を原因とする発音の誤り』（麻痺による運動の障害で発音に誤りが生じる）②『聴覚障害を原因とする発音の誤り』（聴覚障害による聞こえにくさの問題で発音に誤りが生じる）③『器質性の発音の誤り』（発音をする際に使用する舌や口の中の器官が生まれつき平均的な形状とは異なるために発音に誤りが生じる）④『機能性の発音の誤り』（明らかな原因や障害がみつからないにも関わらず発音が遅れてしまう）の４つです。



この 『ことばの先生』の資格では、④『機能性の発音の誤り』をトレーニングの対象としています。
【注：① 『麻痺を原因とする発音の誤り』 ②『聴覚障害を原因とする発音の誤り』③ 『器質性の発音の誤り』が疑われる場合には、医療機関もしくは専門療育機関での治療・療育をお勧めしてください。



なるほど、〝発音の誤り〟が生じてしまう原因について、わかりました。もう１つ質問があります。発音のトレーニングを開始する前に、まず何から始めていけば良いでしょうか？



詳しいトレーニングの方法は、〔具体的訓練法（仮）〕の項目で確認していくとして、発音のトレーニングを開始する上で、支援者側が、まず最初に理解しておかなければならないことがあります。それは〝発音の成長の順序性〟です。



順序性・・聞き覚えがあります。確か『幼児期のことばの成長』の項目で出てきましたね。



はい。その通りです。よく覚えていましたね。『幼児期のことばの成長』の項目では〝ことばの成長には順序性がある〟というお話をしましたが、それと同じで、発音の成長にも順序性があります。



発音の成長にも順序性があるのですね・・・。それって、どういうことでしょうか？詳しく教えてもらえますか？



『〝発音の成長に順序性がある〟』というのはつまり、『０～６歳児さんは、年齢が上がるごとに、決まった順序で、発音できる音を獲得していく』ということです。具体的に例を出すと、人は生まれてから　①まずはパ行・バ行・マ行などの音がきれいに発音できるようになり②次にタ行・ナ行などの音がきれいに発音できるようになり③その次にカ行・ハ行、そしてサ行・ラ行がきれいに発音できるようになるといった具合です。



なるほど。成長とともに、新たに発音できる音を獲得していき、最終的に大人と同じように、全ての音をきれいに言えるようになるということですね。



その通りです。では、このことをふまえて、具体的に２人のお子さんの事例を見ていきましょう。花子さんは、年少クラスの３歳児さんです。「サカナ」の「サ」、「イス」の「ス」、「セミ」の「セ」がきれいに発音できません。そのため、お母さんや園の先生は、花子さんの話している言葉の内容を詳しく聞き取ることができません。
このような場合、ことばの先生は、まず何をすれば良いでしょうか？



うーん・・・難しいです。



まずは　〝発音の誤り〟に共通点を見つけ出しましょう。

共通点？ですか？？





はい。花子さんが、きれいに発音できない音は「サカナ」の「サ」、「イス」の「ス」、「セミ」の「セ」なので、「サ」「ス」「セ」ですね。この３つの音に共通点はあるでしょうか？

えーっと・・・・３つとも、サ行、サ・シ・ス・セ・ソのいずれかの音ですね。共通点とはそういうことですか？





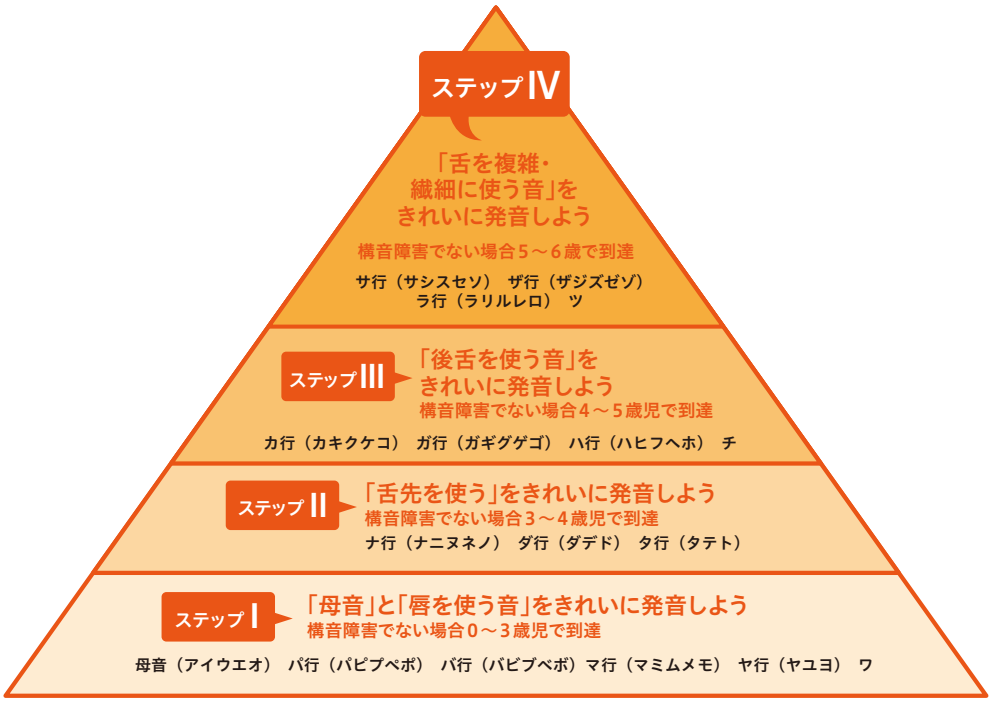
その通りです。 発音の誤りを持つお子さんのトレーニングを始める場合、まず最初に、そのお子さんの発音の中から、誤っていたり、聞き取りにくい音の共通点を探すことが大切です。『カ行の音が難しい』『サ行の音が難しい』『ラ行の音が難しい』のように発音の誤りの共通点を見つけだしましょう。

わかりました。まずは、〝発音の誤り〟の共通点を探るということですね。





はい。次に、そのお子さんの年齢を確認してみましょう。花子さんは３歳児さんということです。３歳でサ・ス・セが綺麗に発音できないというのは、果たして、どのような状態なのでしょうか？考えていきましょう。まずはこの表をご覧ください。





この表はなんですか？



この表は　『０～６歳児さんの発音の成長表』です。定型発達（平均的な成長）のお子さんは、この表に従って発音できる音が増えていきます。さて、この表では、サ行が発音できる年齢は、何歳台となっていますか？



えーっと・・５歳台となっています。



ということは、定型（平均）では、５歳～６歳の間にサ行の音をきれいに話すことができるということですね。



はい。



つまり、サ行（サ・シ・ス・セ・ソ）に関しては花子さんのように３歳児の場合は、まだ発音できていなくても問題はないということになります。この場合は、すぐに発音のトレーニングを開始する必要がありませんので、しばらくは様子をみてみましょう。ということになります。



なるほど！！その年齢ごとに必要とされる発音の段階があるということですね。



では、もう一人の例を見ていきましょう。太郎さんは、年長クラスの６歳児さんです。「タイコ」の「タ」、「ナイテル」の「テ」、「バット」の「ト」がきれいに発音できません。太郎さんの発音の誤りの共通点はわかりますか？



えーっと・・「タ」「テ」「ト」だから、全てタ行の音が誤っていますね。



その通りです。全てタ行の誤りですね。太郎さんは６歳時点で『タ行』が綺麗に発音できないということです。ではこの場合、太郎さんは発音のトレーニングが必要でしょうか？それとも花子さんと同じように現時点では不必要でしょうか？



えっと・・・太郎さんは、タ行が難しい。発音の成長表を見ると・・タ行（タ・テ・ト）は３歳台で綺麗に発音できるようになると書いてある・・・太郎さんは、今、現時点で６歳だから・・・発音のトレーニングが必要だと思います。



その通りです　。タ行の音は、本来３歳～４歳の間できれいに発音ができるべき音なのに、太郎さんは現在６歳の時点できれいに発音できていません。だから発音のトレーニングが必要となるわけですね。では発音の成長について、さらに詳しくみていきましょう。

予備知識　幼児期の発音の成長２

ステップⅠ　母音※と唇を使う音をきれいに発音しよう

※ 母音とは「あ」「い」「う」「え」「お」のこと

解説

構音障害※ではない０～３歳児の発音に相当する段階です。　※構音障害とは発音の障害のこと

0～6 歳児の発音の成長過程において、まず最初にきれいに発音できるようになる音は母音と、『唇を使う音』です。母音とは「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」、『唇を使う音』とは、パ行（「パ」「ピ」「プ」「ペ」「ポ」）・バ行（「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」）・マ行（「マ」「ミ」「ム」「メ」「モ」）のことです。鏡の前で「マ」や「パ」をゆっくり発音してみましょう。必ず一度口を閉じて、その後すぐに口を開ける動きが確認できるはずです。このように、口を開閉する つまり唇を使って発する音をこのテキストでは〝唇を使う音〟としています。言葉の理解力が高まり、この〝唇を使う音〟をきれいに発音できるようになると、これらの音を組み合わせた「ママ（母）」「パパ（父）」「ブーブー（車）」のような〝唇を使う音〟で構成された、意味のある単語が話せるようになります。

この段階で綺麗に発音できる音

母音（「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」）

パ行（「パ」「ピ」「プ」「ペ」「ポ」）

バ行（「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」）

マ行（「マ」「ミ」「ム」「メ」「モ」）

ヤ行（「ヤ」「ユ」「ヨ」）

「ワ」

ステップⅡ 舌先を使う音※をきれいに発音しよう

※ 舌先（舌の先端のこと）

解説

構音障害ではない２～４歳児の発音に相当する段階です。

ステップⅠの〝母音〟〝唇を使う音〟に加えて〝舌先（舌の先端）を使う音〟がきれいに発音できるようになります。タ行・ダ行・ナ行がこの〝舌先を使う音〟になります。鏡の前で「タ」とゆっくりと言ってみましょう。まず舌の先端が前歯の裏にくっつきます、その後すぐに、舌が前歯の裏にくっついている状態から離れます。離れる瞬間に「タ」と音がすることが確認できるはずです。このようにタ行（「タ」「テ」「ト」）・ダ行（「ダ」「デ」「ド」）では、舌の先端を使って、舌打ちに似た動きをすることによって正しい音が作られるわけです。ナ行も同様に発音する際に舌の先端を使います。ちなみに「チ」と「ツ」の２つの音は「タ」「テ」「ト」とは異なる性質をもつ発音ですので、この段階では、まだきれいに発音できなくても問題はありません。

この段階で綺麗に発音できる音

タ行（「タ」「テ」「ト」）

ダ行（「ダ」「デ」「ド」）

ナ行（「ナ」「ニ」「ヌ」「ネ」「ノ」）

ステップⅢ 後舌を使う音※をきれいに発音しよう

※ 後舌（舌の奥の方のこと）

解説

構音障害ではない４～５歳児の発音に相当する段階です。

ステップⅠ〝母音〟と〝唇〟を使う音、ステップⅡ〝舌先〟を使う音に加えて〝後舌（舌の奥の方）〟を使う音がきれいに発音できるようになる段階です。例えば、カ行（「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」）の発音では、舌の奥の方（後舌）を上にあげる運動をすることによって音が発せられます。ガ行も同じ発音のプロセスをたどります。

この段階まで到達すると、発音できる音のバリエーションが増え、随分と話し言葉が聞き取りやすくなります。ただし、「サ」「シ」「ス」「セ」「ソ」などの繊細な舌の使い方を必要とする音、「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」などの舌の動きが複雑でダイナミックな音に関しては、（まだこの段階では）きれいに発音できません。

この段階で綺麗に発音できる音

カ行（「カ」「キ」「ク」「ケ」「コ」）

ガ行（「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」）

ハ行（「ハ」「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」）

「チ」

ステップⅣ 舌を複雑・繊細に使う音をきれいに発音しよう

解説

構音障害ではない５～６歳児の発音に相当する段階です。

この段階では「サ」「シ」「ス」「セ」「ソ」などの舌を繊細に動かすことにより発せられる音や、「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」などの複雑な舌の動きを必要とする音など、高度な発音もできるようになります。通常の会話において（発音が原因で）周りの人が聞き取れないといったことはほとんどなくなります。また、この段階になると、〝音を認識する能力〟が高まります。例えば「サカナ」は、３つの音からなり、最初の音が「サ」で、真ん中の音が「カ」最後の音が「ナ」となりますが、このように単語がいくつの音で構成されているか理解できるようになり、どの音が、どの順に並んでいるかについても正確に認識できるようになるわけです。そのことにより、さらにはっきりと発音ができるようになります。

この段階で綺麗に発音できる音

サ行（「サ」「シ」「ス」「セ」「ソ」）

ザ行（「ザ」「ジ」「ズ」「ゼ」「ゾ」）

ラ行（「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」）

「ツ」

注意事項

Ⅰ～Ⅳの各ステップごとに、それぞれの発音の到達年齢を記載していますが、これは全てのお子さんが、この年齢でこれだけ綺麗に発音できなければならない。ということをあらわしているわけではありません。あくまでも目安として記載したものとなります。そのため、ことばの先生として、大切なことは、ステップⅠからステップⅣまでの発音の成長の流れを捉えておくことです。

ことばのトレーニングを始めよう



ことばのトレーニングを始める前に

1. 褒めて伸ばす

お子さんとの信頼関係作りは、ことばの先生にとって大切な仕事の一つです。どれだけ〝子供のことばの成長〟や〝子供の発音〟に関する知識を持っていたとしても、子供との関係性をうまく作ることができなければ、トレーニングは成り立ちません。お子さんは（もし言葉がまだ理解できない段階であったとしても）先生の声かけや表情、雰囲気を常に見たり感じ取ったりしています。そのため、初回のトレーニングから具体的に絵カードなどを使用して、いわゆる〝お勉強〟的な言語のトレーニングを行っていくのではなく、まずはお子さんとの関係作りから始めて、徐々に本格的なトレーニングへと移行していきます。最初の数回は、遊びの時間を多めにとり、信頼関係の基礎づくりをこころがけましょう。

信頼関係を構築できるようになれば、実際に言葉のトレーニング課題を実施していきます。ここで特に大切になるのが、どれだけ適切なタイミング、頻度でお子さんを〝褒めることができるか〟ということです。トレーニング課題でお子さんが正解できた時は、その場ですぐに褒めてあげましょう。その際は子供にわかりやすいポジティブな短い言葉で褒めます。誤ったときは特に反応しません。正解した時だけ褒める、誤った時は反応しない。これを繰り返すことにより、褒められた行動（正解の反応）だけが増え、言語面が向上していきます。このことを応用行動分析学という学問の中では『正の強化』と呼びます。

トレーニング課題に関してだけではなく、お片付けができた時、ご挨拶ができた時や、何か成功した時にはあらゆる場面で、必ず褒めてあげましょう。子供の療育は〝褒めて伸ばす〟が基本です。褒める時のタイミングも重要です。課題ができたら、その時にその場で褒めること大切です。後で褒める。では意味がありません。必ずその時々ですぐに褒めてあげてください。褒める際は言葉だけではなく表情やジェスチャーも大切です。全身を使って少し大げさなくらいに褒めてあげましょう。

褒め言葉の例

「すごい」「がんばったね」「さすが～ちゃん」「かっこいい」「えらい」「かしこい」「さいこう」「〇〇ちゃんのかち」「〇〇ちゃんがいちばん」「ナイス」「いいね」「すばらしい」「じょうずだね」「やったー」「おりこう」「だいせいかい」「おみごと」「できてる」「できたね」など



トレーニングが終わった後には『おもちゃで遊ぶ』『おやつを食べる』などのご褒美を必ず用意しましょう。これを聞くとみなさんの中には、遊びや物でつるという悪いイメージを持たれるかたもおられるかもしれませんが、これは、応用行動分析学の観点で解説すると、トレーニングへの意欲を高めるための〝強化子〟にあたります。〝強化子〟とは、ある行動を増やすためのご褒美のようなものです。このような『ご褒美』が実際に言語のトレーニングの効果につながります。

2．『ことばのトレーニング』を行う環境について

お子さんの集中力や意欲を高めるための環境設定はとても大切です。机の上には課題に使う絵カードや道具だけを置き、トレーニングに直接関係のないものは片付けておきましょう。また、トレーニングを行う部屋にも、出来るだけ物は置かず、目の前の課題だけに集中できる環境を用意しましょう。トレーニングを行う時には、終了後のご褒美遊びで使うおもちゃなども、お子さんの目につかない場所に収納しておくことをお勧めします。

例えば目に映るものに対して、次々と興味が移ってしまい、〝見に行きたい〟という衝動に駆られてしまうというお子さんが、ことばのトレーニングに来られたとします。そのような場合、部屋のあちこちに物が置いてあると、先生が目を離した一瞬の隙に、立ち歩いてしまうなど、怪我につながりかねません。発達障害児に限らず、未就学児さんは大人が想定できない動きをすることがよくあります。集中できる環境作りはもちろんですが、怪我などの最悪の事態を想定して環境設定をしておきましょう。

３．トレーニングは〝継続〟が大切

ことばのトレーニングの効果には、個人差があります。トレーニングの進み具合はお子さんそれぞれに違います。数ヶ月のトレーニング期間で、どんどん言葉が増えていくお子さんもいれば、１年かけて、ようやく１つの単語が言えるようになるお子さんもいます。すぐに目に見える結果が出ないとしても焦らずにコツコツと継続していきましょう。

もし目に見える効果がすぐにあらわれなかったとしても、継続することにこそ意味があります。なぜなら学習トレーニングは、積み重ねることで初めて効果が見えてくるものであるからです。

コップに水を注ぐと、水がコップの中で増え始めます。横からそのコップを眺めていても、すぐに水があふれ出ることはありませんので大きな変化は確認できません。しかし、さらに水を注ぎ続けると、水がコップからあふれ出ます。その時ようやく目に見える明らかな変化（コップから水があふれでる）があらわれるわけです。

これは当然、言語面のトレーニングにも当てはまります。目に見える効果がすぐに確認できなくても、みなさんが行なったトレーニング内容はお子さんの中に着実に蓄積されていくのです。

まとめ

この初級編テキストの中では、全５段階・７種類の具体的なトレーニング課題を学んでいきます。１つのトレーニング課題における実施期間は平均で約半年間です。つまり同じトレーニング内容を繰り返し繰り返し、半年間、続けてお子さんに教えていかなければいけないということです。

① 同じことを継続して、教え続ける根気を持つ。
②『未就学児のことばの成長』について全体像を把握し、常に勉強を惜しまない。
③ 対象児に楽しく学んでいただけるように、教え方や教材についての工夫を惜しまない。

ことばのトレーニング～トレーニング課題の全体像を見てみましょう～

トレーニング１　『物』や『人』をあらわす言葉を理解するためのトレーニング

ステップ1　ことばを話すための準備をしよう

対象児：意味のある言葉が話せない、もしくは話せていたとしても 10 語未満である児童

トレーニング２　A『物』や『人』をあらわす言葉を話すためのトレーニング
B『動作』をあらわす言葉を理解するためのトレーニング
C『動作』をあらわす言葉を話すためのトレーニング

ステップ2　ことばを話してみよう

対象児：意味のある言葉は出ているが、名詞（物や人・場所をあらわす単語）が中心で、表出語彙のバリエーションが少ない児童

トレーニング３　A『文』を正しく理解するためのトレーニング
B『文』を話すためのトレーニング

ステップ3　文で話そう

対象児：単語は話せているが、文として話すことができない児童

トレーニング４　A 質問に答えるトレーニング（選択）
B 質問に答えるトレーニング（表出）

ステップ4　質問に答えよう

対象児：文を話せているが、返答ができない児童

トレーニング５　対話トレーニング

ステップ5　会話をしよう

対象児：質問に答えることができるが、会話のやり取りを続けることができない児童

▶ それでは、具体的にそれぞれの段階、①～⑤で実施するトレーニングの内容を見ていきましょう。

トレーニング１

『物』や『人』をあらわす言葉について理解するためのトレーニング

ステップ１　『ことばを話すための準備をしよう』へのアプローチ

対象となる児童

意味のある言葉が話せない、もしくは話せていたとしても 10 語未満しか話すことができない。

評価方法

両親から対象児の話せている言葉を聴取※する。
もしくは、自由遊びの中で、児童が話せている、(意味の伴った)単語の数を把握する。
その際に（意味の伴った）単語を話している様子が確認できない、もしくは 10 語（10 種類の単語）よりも少ないようであれば、
『トレーニング①『物』や『人』をあらわす言葉を理解するためのトレーニング』から開始していく。

※保護者からの意見だけを参考にすると、実際の児の正確な語彙能力を把握できないことがある。

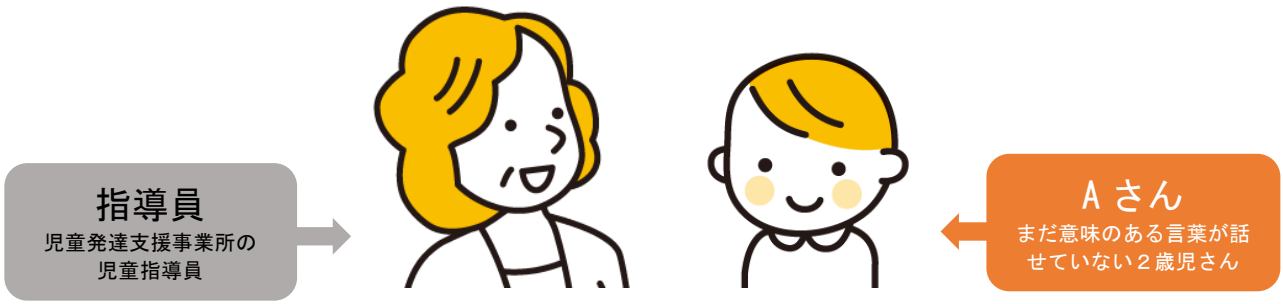
解説

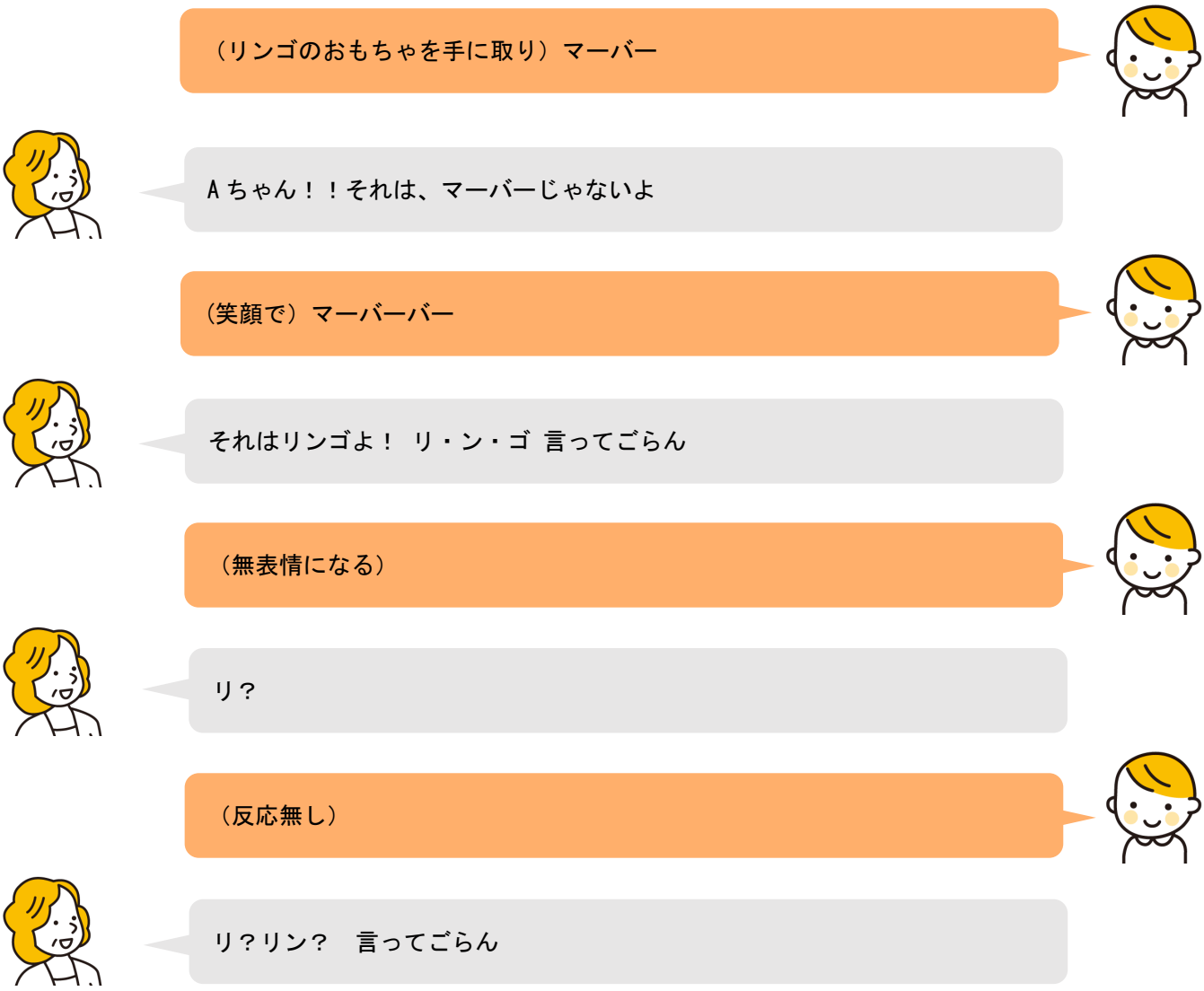
トレーニング①の項目では、単語がまだ話せていない・もしくは、話せる単語の数が少ないお子さんに対するアプローチについて詳しく解説していきます。

みなさんは『幼児期のことばの成長』の項目で、定型発達児の場合、意味のある言葉（単語）を話し始める時期は、生後 12 ヶ月前後であるということを学びました。言語発達学的観点からみると、およそ 1 年間の猶予をみたとしても、少なくとも 2 歳までには、初語が出ている状態が望ましいといわれています。そのため、言語臨床の現場では、2 歳の時点で〝意味の伴った単語〟をまだ話すことができない場合には、専門的な言語トレーニングを受ける必要があるという結論に至るわけです。

この時期に、最も重要なトレーニングが以下となります。
『言葉（物や人をあらわす名詞単語）を聞いて、正しく理解することができる』

さて、私は言語発達学の講師という仕事柄、定期的に療育の現場に顔を出すことがあります。その際、このような場面に遭遇することが何度かありました。





このように、言葉を教える際に、とにかく１つの単語を言わせることばかりに固執する教え方では、不十分です。ただ単に「リ・ン・ゴ」という３文字の音の声真似をさせる。それだけでは、仮に「リ・ン・ゴ」と声真似ができるようになったとしても、そこに意味が伴わないわけです。意味の伴わない声真似は〝言葉〟ではなく、ただの〝音声〟です。
重要なのは単語の概念（意味合い）を理解させることです。その先に〝単語を話す〟という段階があります。

さて、突然ですが、皆さんに考えていただきたいクイズがあります。

Q1 スペイン語で車のことを何と言いますか？

次の質問です。

Q2 スペイン語で「カロ」とは何のことだと思いますか？

⑴の質問に、正答できなかった人は、⑵の質問にも答えることができなかったはずです。スペイン語単語を理解できていて、⑴が正答できた人は⑵の質問も正答できたはずです。ちなみに「車」はスペイン語で「カロ」です。
ですので⑴がわからなかった人は⑵もわからない。という当然の結果となるわけです。

このクイズは以下の法則をあらわしています。

ある単語を話すことができているということは、
既に、その単語を聞いて理解できている状態である。

もう一つの例を考えてみましょう。

皆さんは「バイク」と聞いた瞬間、頭の中に何が思い出されるでしょうか？
２輪のエンジンのついた乗り物のことが思い浮かんだはずです。

ではなぜ、みなさんは「バイク」と聞いて、２輪のエンジンのついた乗り物のことが思い浮かんだのでしょうか？
それは皆さんが『バ・イ・ク』という３文字の音のつながりが２輪のエンジンのついた乗り物のことを表しているということを理解・認識できているからです。

もし「バ・イ・ク」という３つの音のつながりが、『２輪のエンジンのついた乗り物』のことを表しているということを理解・認識できていなければ、
左の絵を見た時に「バイク」と発語することができません。



これらのことをまとめると、
我々人間は、自分が『聞いて理解することが出来る言葉』だけを、話すことができるということがわかります。
つまり、『理解』が先にあって、次の段階で『話すこと』ができるということです。

必ず、『理解』が先、『話すこと』が後です。

この法則はトレーニング①で出てくる『物や人の名前』だけではなく、動作語や形容詞、文章表現についても同じように当てはまります。

この話を頭の片隅に入れておいた上で、ことばがまだ出ていないお子さんの言語トレーニングについて考えてみると・・・

〝リンゴ〟という言葉を教える際に、「リ・ン・ゴ」の３文字を言わせようとするのではなく、まずは、お子さんの中に「リンゴ」という単語を聞いて、赤くて丸い果物が頭の中に思い浮かぶ状態を作ってあげることが大切なのです。

つまり、言葉の〝理解力〟を伸ばしていくことこそが、結果的には言葉を話すことにつながっていくというわけです。



我々人間は、幼児期に、この『理解力』の成長に加えて、『発音の能力』が成熟して、言葉を正しく話せるようになります。

トレーニング１

『物』や『人』をあらわす言葉について理解するためのトレーニングを実施してみよう

準備物

名称絵カード（リンゴ　バナナ　ゾウ　ライオン　カメ　など）
※名称カードは個々の児の好むカテゴリーの名詞でも良い
（例）乗り物が好きな児の場合、クルマ、デンシャ、バイクの絵カードを使用する。

手順

❶２枚の絵カードを用意する。

❷１枚ずつ、カードを机に並べながら「これはリンゴ」「これはバナナ」のように先生が呼称※する。
※呼称・・カードの名称を言って聞かせること

❸「リンゴはどっちかな？」「バナナはどれかわかる？」など声かけをする。

❹・児童が正しい方のカードを選び取ったり、指差すことができれば、その場ですぐに褒める。
その後カードを戻し先生が呼称する。
・児童が誤った場合は無反応でカードを戻し、その後、徒手的に正しいカードを選ばせながら先生が呼称する。

２枚の中から確実に正しい１枚を選ぶことができるようになるまで、練習を継続する。
２枚の中から確実に選び取ることができるようになれば、枚数を増やし、次は３枚の中から１枚を確実に選べるようにする。次は４枚の中から・・・のように、枚数をどんどん増やしていく。５枚の中から確実に正しいカードを選択できるようになれば、ステップ１のトレーニングを完了とする。

ポイント

●偶然に（理解できていない状態で）正しいカードを選択した場合でも、
正しい方のカードを選択できた場合には、必ず褒めてあげましょう。

●絵カードが難しい場合は、おもちゃ、実物などを使用しても良いです。

●練習を継続しても難しく、正答できる気配がない場合でも、徒手的に正解を伝えながら、練習を継続していきます。
使用するカードは最初に決めた５～10 枚の絵カードセットからできるだけ変更せずに、同一のセットを使用して
トレーニングしていきましょう。

絵カードとして使用する名詞・名称の例

果物	リンゴ　バナナ　ブドウ　ミカン　イチゴ
人	ママ　パパ　　バァバ（おばあちゃん）　ジイジ（おじいちゃん）
動物	ネコ　イヌ　トリ　サカナ　キリン　ゾウ　ライオン　カメ　ウサギ
乗り物	クルマ　デンシャ　バイク
道具	メガネ　トケイ　ボウシ

※トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。まずは基礎をつかむためにビデオの通りに実施できるようになりましょう。

トレーニング２

②-A『物』や『人』をあらわす言葉を話すためのトレーニング
②-B『動作』をあらわす言葉を理解するためのトレーニング
②-C『動作』をあらわす言葉を話すためのトレーニング

ステップ２　『ことばを話してみよう』へのアプローチ

対象となる児童

味のある言葉は既に１０語以上、出てきているが『名詞（物や人・場所をあらわす単語)』が中心で、話せている言葉のバリエーションが少ない児童

評価方法

児童の話している様子を確認した際に、『名詞（物や人、場所などを表すことば)』は１０語（１０種類）以上話せているが、動作を表す言葉（「食べる」「飲む」「座る」など）を１０語以上話すことが出来ていない児童であれば、トレーニング②-A、②-B、②-C の３つの課題から開始していく。

解説

トレーニング②は、②-A、②-B、　②-C の３つの課題からなります。
３課題とも、この時期の児童にとって、とても重要なトレーニングとなります。

復習

トレーニング①『物』や『人』をあらわす言葉について理解するためのトレーニングでは『理解』に関するトレーニングを実施しました。
ここで述べた『理解』とは、『聞いて理解できる』ということです。

トレーニング②-A に進むと、今度は『物』や『人』をあらわす言葉について話していくトレーニングを実施します。
※このテキストでは、繰り返し、ことばの成長における〝理解面〟と〝表出面（話す）〟の関係性について解説してきました。（〝理解〟とは〝聞いて理解できる〟、〝表出〟とは〝ことばとして話す〟という意味です。）

〝ことばの理解面〟と〝ことばの表出面〟では、必ず〝理解面〟が先行します。

今後のトレーニングにおいても、名詞に限らず、〝理解面のトレーニング〟と〝表出面のトレーニング〟は、必ず対で実施していきます。

トレーニング２

②-A『物』や『人』をあらわす言葉を話すためのトレーニング

準備物

トレーニング①で使用した名称カードをそのまま使用する

手順

❶「これなんだ？」「これは何？」のように尋ねながら児童に絵カードを見せて呼称※させる。
※絵カードがあらわしているものを言ってもらう

❷・児童が正しい名称を呼称することができれば、すぐに褒める。
→正解したカードは机の下など児童の目にとどかないところに置く

・児童が誤った回答をしたり、無反応であったりなど不正解の場合、
正しい名称を先生が呼称して聞かせながら、不正解カードを机の上に並べていく。

❸全てのカードが終わったら、机に並べられた不正解カードを使用して、
［トレーニング①　『物』や『人』をあらわす言葉について理解するためのトレーニング］を実施する。

ポイント

呼称させる課題ではありますが、児童に無理やり言葉を話させようとしてはいけません。

「リ・ン・ゴよ　ほら言ってごらん」のように言わせようとすると、児童への負担が増します。児童への負担が増せば、意欲が低下し、トレーニングを継続できなくなる可能性が高くなります。トレーニングを継続できなければ本末転倒です。

表出できない児童には、⑴正しい言い方を横から聞かせてあげる ⑵理解課題で復習する を繰り返し実施していけば良いです。

※トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。

トレーニング２

②-B『動作』をあらわす言葉を理解するための トレーニング

準備物

動作語絵カード

絵カードとして使用する動作カードの例

・食べる　・飲む　・寝る　・泣く　・洗う　・捨てる　・見る
・書く　・拭く　・切る『ハサミで紙を切る』ではなく、必ず『包丁で（果物を）切る』のカードを使用しましょう

手順

トレーニング①『物』や『人』をあらわす言葉を理解するためのトレーニングの手順と同じ要領で実施する。

ポイント

必ず「〝食べる〟はどれ？」のように動作語のみを呼称します。
例えば「ご飯を食べる はどれ？」と声かけしてしまうと〝ご飯〟というワードだけを聞いて、カードのご飯の絵の部分を認識してしまい、〝食べる〟という動作語を理解できていなくても正しく選択できてしまう可能性があります。

この項目ではあくまでも〝動作語 の理解力〟を伸ばすことが目的ですので、動作語のみを聞いて正しい絵カードを選択できるように練習していきます。

×「ご飯を食べる はどれ？」「絵を書く はどれかな？」
〇「食べる はどれ？」「書く はどれかな？」

※ トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。

トレーニング２

②-C『動作』をあらわす言葉を話すための トレーニングを実施してみよう

準備物

ステップ②-B『動作』をあらわす言葉を理解するためのトレーニングで、使用した動作語カードをそのまま使用する。

手順

❶「この子（この人）は、なにをしているかな？」「何している？」のように児童に尋ねながら、カードを見せて呼称させる。

❷・児童が正しく動作語を呼称することができれば、すぐに褒める。
→正解したカードは机の下など児の目にとどかないところに置く

・児童が誤まった回答をしたり、無反応であったりなど不正解の場合、
正しい名称を先生が呼称して聞かせながら、不正解カードを机の上に並べていく。

❸全てのカードが終わったら、机に並べられた不正解カードを使用して、
「トレーニング②-B『動作』をあらわす言葉を理解するためのトレーニング」を実施する。

ポイント

『トレーニング②-A』の【ポイント】に準ずる。

トレーニング３

③-A（先）『文』を正しく理解するためのトレーニング
③-B（後）『文』を話すためのトレーニング

ステップ③『文で話そう』へのアプローチ

対象となる児童

単語（名詞・動作語など）は話せているが、文（２語連鎖文以上）として話すことができない児童

評価方法

児童の話している言葉を聞き取りした際に、単語１語としては話せているが、２つ以上の単語を組み合わせて、連鎖文として話すことができていない場合であればトレーニング③-A、③-B の２つの課題から開始していく。

解説

ステップ①～②に関しては、語彙数（話せる「単語の数」）を増やしていく事がトレーニングの中心でした。
（『単語』とは即ち、「リンゴ」とか「ママ」、「食べる」、「小さい」など、１つの言葉のことです）

しかしながら、日常会話において、この『単語』だけを使用した言葉のやり取りでは、相手に伝えることのできる内容に限界があります。ですから、我々はこれらの単語を２つ以上組み合わせて『文』を作り、その文を使って複雑な意思疎通＝会話をしていくわけです。

さて、『幼児期のことばの学び』は、スモールステップ、すなわち段階的に行うことが基本となります。
ですから、文を学んでいくにも段階があります。最初は基礎的な文の構造原理を学ばなければいけません。

ではこの『文』の最も基礎となる形、つまり、『文の最小単位』は、どのようなものでしょうか？

答えは『２語連鎖文』です。

２語連鎖文とは、２つの単語を、組み合わせたものです。
例えば、「リンゴ」と「食べる」の２語を組み合わせたものが「リンゴ（を）食べる」という２語連鎖文です。「小さい」と「リンゴ」の２語を組み合わせたものが「小さい リンゴ」、こちらも２語連鎖文です。
このような２語連鎖文には、様々な種類がありますが、幼少期の言葉の成長において、特に重要なものが『動作語を含んだ文』です。
先ほどの例の中では、「リンゴ（を）食べる」が、この『動作語を含んだ文』にあたります。

このトレーニング③では、『動作語を含んだ２語連鎖文』を正しく理解したり、話したりすることを学びの軸としていきます。

トレーニング３

③-A『文』を正しく理解するための トレーニングを実施してみよう

準備物

９枚の『語連鎖文・絵カード』

カード１（ママが）リンゴ　を　食べる
カード２（ママが）リンゴ　を　洗う
カード３（ママが）リンゴ　を　切る
カード４（ママが）ミカン　を　食べる
カード５（ママが）ミカン　を　洗う
カード６（ママが）ミカン　を　切る
カード７（ママが）バナナ　を　食べる
カード８（ママが）バナナ　を　洗う
カード９（ママが）バナナ　を　切る

※父子家庭など、お子さんの家庭の事情によっては（パパが）リンゴ を 食べるなど、主語をパパとするカードを使用しても構いませんが、その場合は、９枚全てのカードを（パパが～）のカードにして、主語を統一させましょう。

手順

❶９枚の『語連鎖文・絵カード』を用意する。（必ず９枚で実施する）

❷１枚ずつ、カードを机に並べながら「これは、リンゴを食べてる」「これはリンゴを洗っている」「これは・・・のように先生が文を呼称する。

❸並べ終わったら「リンゴを食べているのはどっち？」「バナナを切っているのはどれかわかる？」など声かけをする。

❹ ・児童が正しい方のカードを選び取ることができれば、その場ですぐに褒める。
その後カードを戻し、先生が文を呼称する。

・児童が誤った場合は無反応でカードを戻し、その後、徒手的に正しいカードを選ばせながら、先生が文を呼称する。

※ ９枚全てのパターンで、確実に正しい１枚を選ぶことができるようになるまで、練習を継続する。

ポイント

上記の９枚のカードで、実施する場合は、必ず「リンゴ」「ミカン」「バナナ」「食べる」「洗う」「切る」の６単語それぞれを児童が正しく意味理解できているか、あらかじめ確認しておく。（語彙ではなく、文構造を学ぶ課題である。）

※ トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。

トレーニング３

③-B『文』を話すためのトレーニングを実施してみよう

準備物

トレーニング③-A『文』を正しく理解するためのトレーニングで使用した９枚の『語連鎖文・絵カード』

手順

❶「ママは、何をしているかな？」「この人はどんなことしているかな？」のように児童に尋ねながらカードを見せて、呼称させる。

❷・児童が正しく文を呼称することができれば、すぐに褒める。
→正解したカードは机の下など児の目にとどかないところに置く

・児童が誤まった回答をしたり、無反応であったりなど不正解の場合、先生が正しい文を呼称して聞かせながら、不正解カードを机の上に並べていく。

❸全てのカードが終わったら、机に並べられた不正解カードを使用して、
トレーニング③-A『文』を正しく理解するためのトレーニングを実施する。

ポイント

ステップ③-B で、助詞の誤りがあった場合でも正答とするが、正しい助詞の使い方を声かけして、児童に聞かせてあげる。
助詞の誤り・・・例　「リンゴ　が　食べてる」　「バナナ　で　切る」などと言う。

※ トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。

トレーニング４

④-A 質問に答えるトレーニング（理解）
④-B 質問に答えるトレーニング（表出）

ステップ４ 『質問に答えよう』へのアプローチ

対象となる児童

文を話せているが、質問されたことに対して返答ができない児童

評価方法

２語連鎖文以上の文章で話すことができているにも関わらず、質問に対して、答えずに黙っている。おうむ返しで、同じことを言う。もしくは、関係のない発話をする。などの反応を示し、尋ねられた事柄に対して、適切に返答することができない場合、トレーニング④を実施していきます。

解説

トレーニング④を必要とするお子さんは、質問に対して返答することが苦手なお子さんです。自閉傾向の強いお子さんに関しては、特にこのステップ④の課題が、重要なポイントとなります。もちろん自閉傾向のないお子さんであっても、トレーニング④は幼児期の言語発達において、重要な課題です。なぜなら日常会話での言葉のやり取りの基本は『質問』と『応答』で成り立っているからです。

次のページに、トレーニング④で使用する８つの質問リストを記載しました。もちろん、この８つの質問リストにのみ応答することができるようになれば、それで良いというわけではありません。未就学児の間に答えることができるべき質問を、言語発達学的視点から考察して、それらの中から難易度別に最低限押さえておきたい質問を抜粋したのが、下記の８つの質問リストです。

そのため、この８つの質問に自然に答えることができるようになれば、少なくとも『尋ねられた質問に適切に答える』という習慣がついていると言えます。この習慣付けこそがこのトレーニング④の目指すところです。

８つの質問リスト

⑴ お腹が空いたらどうする？

⑵ 手が汚れたらどうする

⑶ 眠い時はどうする？

⑷ 寒い時はどうする？

⑸ 雨が降ったらどうする？

⑹ ジュースを机にこぼしたらどうすれば良い？

⑺ 怪我をしたらどうする？

⑻ 火事になったらどうする？

模範解答例

「ご飯を 食べる」「食べに 行く」など

「手を 洗う」「おてて 洗う」など

「寝る」「ねんね する 」など

「服を 着る」「部屋に 入る」など

「傘を 持つ（さす）」など

「机を 拭く」「ジュースを 拭く」など

「病院に 行く」「絆創膏を はる」など

「火を 消す」「消防車を 呼ぶ」など

トレーニング４

④-A 質問に答えるトレーニング（理解）を実施してみよう

準備物

ヒントカード８枚

ヒントカード１	ご飯を食べる	ヒントカード５	傘をさす
ヒントカード２	手を洗う	ヒントカード６	机を拭く
ヒントカード３	寝る	ヒントカード７	病院に行く
ヒントカード４	服を着る	ヒントカード８	消防車を呼ぶ

手順

❶机の上に、８枚のヒントカードを並べておく

❷先生が対象児に、質問リスト⑴～⑻までを、順番に読み上げて尋ねる。
例「お腹が空いたらどうする？」と児に尋ねる。

❸・８枚のカードの中から、【ヒントカード１　ご飯を食べる】を選択することができれば、
その場ですぐに褒める。
褒めた後に、先生が問題文と正答を続けて呼称して聞かせる。（例「お腹が空いたら、ご飯を食べる。だね」）

・選択できない、選択しない、もしくは誤ったカードを選択した場合は、徒手的に正しいカードを選ばせながら、
先生が問題文と、正答を続けて呼称する。（例「お腹が空いたら、ご飯を食べる。だね」）

※トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。

トレーニング４

④-B 質問に答えるトレーニング（表出）を実施してみよう

手順

❶先生が対象児に、質問リスト⑴～⑻までを、順番に読み上げて尋ねる。
例「お腹が空いたらどうする？」と児童に尋ねる。

❷・「ご飯（を）食べる」などと２語連鎖文で応答することができれば、その場で褒める。
（⑶眠い時はどうする？の質問に関しては「寝る」と単語で答えても正答とする。）

・答えない。もしくは、「ご飯。」や、「食べる。」のように単語のみで答える（質問⑶は除く）、
全く関係のない返答をする、おうむ返しで復唱してしまうなど、誤りが見られる場合は、
正答のヒントカードを児童に見せながら、先生が問題文と、正答を続けて呼称する。
（例「お腹が空いたら、ご飯を食べる。だね」）

全ての質問が終わった後に、トレーニング④-A 質問に答えるトレーニング（理解）の課題に戻って復習する。

ポイント

・最初は、丸覚えで良いので、まずはこの８つの質問に対して正しく返答するという習慣
（＝質問に答える習慣）をつけることが大切です。

・助詞の間違えが確認できた場合は、先生が正しい表現を言って聞かせてあげましょう。
（言いなおさせる必要はありません）

トレーニング５

対話トレーニング

ステップ５　『会話をしよう』へのアプローチ

対象となる児童

質問に答えることができるが、会話のやり取りを続けることができない児童

評価方法

・お昼ご飯のメニューや、幼稚園での遊びの内容など、特定の話題（過去の実体験）について、
児童に話しかけた際に会話が続かない。

・質問すると、返答はできるが、児童から自発的に話すことはない。

・話題が次々と移り変わっていく。

・児童が一方的に話してしまう。

など、『会話でのやり取りを続けることへの難しさ』が確認できる児童に対しては、
トレーニング⑤を実施していきます。

解説

トレーニング⑤　対話トレーニングでは、日常生活での会話ルール・法則を、ことばの先生と対象児が、実際に話し合いながら学んでいく課題となります。

言語聴覚士はこの課題のことをFT（フリートーク）と呼びます。

FT における双方向の会話でのやり取りのことをターンテイキングと呼びますが、このターンテイキングには 一定の決まり事やルールがあります。そのルールに従って会話のトレーニングを繰り返すことで、お子さんの対話力・会話力はどんどん伸びていきます。

対話トレーニングは、これまでのトレーニング①～④と比較して、非常に自由度が高い訓練です。自由度が高いゆえに、現場の先生方のスキル次第で、児童の会話力を引き出して向上させることもできますが、残念ながら、ただの会話どまりになってしまうこともあります。ただの会話にならないよう、初級編 FT での先生側の心構え、コツをまとめました。次のページで見てみましょう。

トレーニング５

対話トレーニングを実施してみよう

A対話トレーニングで心がけるべきこと

❶児童、先生の双方が楽しみながら会話していくことを心がける（時にはユーモアのセンスも必要です）。

❷子供と、先生がお互いに発言する状況を作る（先生から一方的に質問するのではなくお互いに発言する機会をつくる）。

❸児童から一方的に話してしまう状況であれば、相手（先生）が話しているときは、聞くという会話の基本姿勢を教える。

❹話題を維持する（次々と話題を変えるのではなく１つの話題につき、少なくとも３分程度は持続して会話ができるようにする）。

❺１つの話題について児童からの情報が少ない場合には、「何を？」「誰が？」「いつ？」「どこで？」「誰と？」感想（「どう思った？」）などに関してその都度、児童に尋ねていく。

❻『語順（「～が～を～する」のような語の並び方）』や『助詞（～が・～に・～を・～の など）』に関して、文法的な誤りがみつかった場合は正しい話し方を教える（言い直させるのではなく、正しい言い方を声かけして聞かせてあげる）。

❼最初は５分間の会話の継続を目指す。それができれば 10 分まで会話の継続時間を伸ばしていく。

B話題について

対話トレーニングでの『話題』は、児童の実体験に基づいたものが適当です。想像上の話や、空想話はできるだけ避けましょう。『児童が毎日行うことがら』に関する話題であれば、毎回、反復して練習することができます。（園児であれば）園生活、家庭生活、習い事や、事業所への通所などが、毎日行う事柄です。その中でも『①食事に関する話題』『②遊びに関する話題』は毎日聞いても違う答えが返ってきますし、応用しやすいのでオススメです。

C対話の中で児童が沈黙した場合に有効な教え方

対話トレーニングにて、言葉の先生が、いくつかの質問を尋ねても、児童は答えることが出来ずに黙ってしまったり、全く見当違いの返答をしてしまったりする場合があります。そのような時の対処法について対話の具体例をみながら学んでいきましょう。

対話例



例１


今日のお昼ご飯は、何を食べたの？

食べた。



何を食べた？

・・・・



じゃあ　誰と食べたの？

えっと・・・忘れちゃった。



今日は幼稚園で何をして遊んだ？

えっと・・・



どこで遊んだ？

わからない。


これでは、一方的に大人（先生）からの質問に子供が答えるだけになってしまっています。またヒントの提示もできていません。このように会話において、もし対象児さんが黙ってしまった場合はどのように対応すれば良いでしょうか？

対話トレーニングで、児童が黙ってしまった時の対処法として、皆さんに学んでいただきたいポイントが以下の２つです。

①先生が、子どもに自分の経験（創作でも良い）を話すことによって、正しい答え方の例を聞かせてあげる。

②子供が答えることができない場合には、選択肢を用意してあげる。

対話トレーニングでは、この２つポイントを意識して実行するだけで、児童の会話力を伸ばしてあげることができます。このことを踏まえて、【例３】【例４】の対話をみてみましょう。

例３


今日のお昼ご飯は、何を食べたの？


食べた。


何を食べたのかな？


・・・・


先生はねえ。白いご飯と、お魚と、お味噌汁食べたよ。デザートはプリンだった。美味しかったなあ。


僕はねえ。ご飯と、ハンバーグ食べた。


ハンバーグ美味しそうだね。先生も大好き。誰とハンバーグ食べたの？


えっと・・・忘れちゃった。


先生はねえ。お友達と食べたよ。


僕もねえ　お友達と食べた　ゆみちゃんと、けんちゃんと


そうなんだね。

【例３】では、先生が、子どもに自分の経験を話すことによって、このような対話場面でどのように受け答えをすれば良いのかについて、対象児に正しい答え方の例を聞かせています。児童はこれを聞くことにより、どのように答えれば良いのかに気づき、正しく答えることができました。先生が自分の経験を話したからといって、この例のように１回のトレーニングですぐに正しく言えることは難しくても、毎回のトレーニングの中で、正しい答え方の例を何度も聞かせてあげることで、徐々に適切な応じ方を学び、正しく返答できるようになってくるお子さんが多いです。

例４


今日は、幼稚園で何をして遊んだの？


えっと・・・


どこで遊んだ？


わからない。


お外で遊んだ？それともお部屋で遊んだ？


お外で遊んだよ。


先生もお外で遊ぶの好きだよ。お外で何をして遊んだのかな？


えっと・・・忘れちゃった。


そっか忘れちゃったんだね。　えーっと　じゃあ　滑り台かな？　それともお砂場で遊んだ？


うん、お砂場で遊んだよ。


お砂場遊びはどうだった？


楽しかった。

【例４】では、「お外で遊んだ？それともお部屋で遊んだ？」のように、選択肢を用意してあげることで、児童が選択することで、答え方を学んでいる様子がわかります。話題として、『①食事に関する話題』と『②遊びに関する話題』をお勧めした理由の一つとして、先生側が選択肢を出しやすい話題であるということが言えます。例えば、『食事に関する話題』の場合は、「パンだったかな？それともご飯だった？」「お肉だった？お魚？どちらでもない？」などのような選択肢を提示できます。

※ トレーニングの基本を押さえれば、その基本の形に従って、皆さんがトレーニング方法を独自にアレンジしても構いません。

評価方法まとめ

● （意味の伴った）単語を話している様子が、確認できない。
もしくは 10 語（10 種類の単語）よりも少ない。.

➡トレーニング①から開始

● 『名詞（物や人、場所などを表すことば)』は 10 語（10 種類）以上話せているが、
動作を表す言葉（「食べる」「飲む」「座る」など）を話すことが出来ていない。

➡トレーニング②から開始

●単語１語としては話せているが、２つ以上の単語を組み合わせて、連鎖文として話すことができていない。

➡トレーニング③から開始

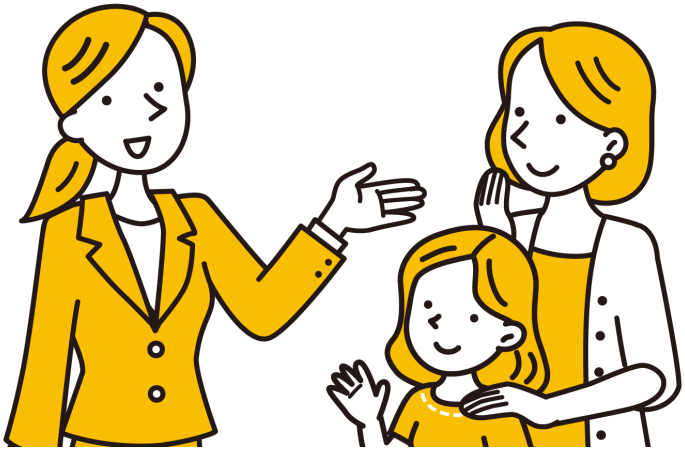
● ２語連鎖文以上の文章で話すことができているにも関わらず、質問に対して、答えずに黙っている。
おうむ返しで、同じことを言う。もしくは、関係のない発話をする。
などの反応を示し、尋ねられた事柄に対して、適切に返答することができない。

➡トレーニング④から開始

●お昼ご飯のメニューや、幼稚園での遊びの内容など、特定の話題（過去の実体験）について、
児童に話しかけた際に会話が続かない、質問すると、返答はできるが、児童から自発的に話すことはない。
または、話題が次々に移り変わっていく。児童が一方的に話してしまう。
など、『会話でのやり取りを続けることへの難しさ』が確認できる。

➡トレーニング⑤から開始

保護者様への対応



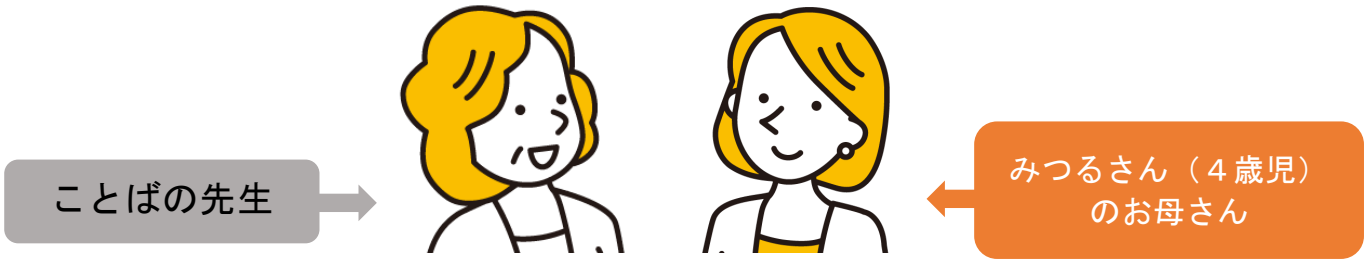
はじめに

ことばの先生として仕事を進めていく上で、重要な業務の一つが『保護者対応』です。
ことばの先生の業務では、お出迎え、お見送り、言葉のトレーニング後の振り返りや、保護者面談など、あらゆる場面で保護者様と関わる機会があります。
特にトレーニング後の振り返りは保護者様と、じっくり話すことができる大切な機会です。保護者様との意見交換を通じて、より良い支援へとつなげていきましょう。
このテキストではこれまで、ことばの先生と対象児との信頼関係づくりの重要性について何度かお伝えしてきました。同様に、ことばの先生と保護者様との信頼関係についても、トレーニングを進めていく上で必要不可欠な事項であると言えます。

さて保護者様との信頼関係を築く上で、みなさんは、どのようなことを心がけるべきだと思いますか・・？

保護者様は、お子さんを療育に通わせる中で、スタッフの普段の仕事ぶり（お子さんとの接し方、面談での対応や、立ち振る舞いなど）をみているので、ことばのトレーニングでの効果はもちろんのこと、『我が子をこの事業所に通わせて良かった』『この先生に療育をしてほしい』などと思っていただけるような、立ち振る舞いができなければなりません。ことばの先生として、ふさわしい清潔感のある身だしなみ、挨拶はもちろんのこと、明るく朗らかで、はきはきとした元気な振る舞いを心がけていくことが大切です。ご家族さんとの信頼関係の構築が前提で、お子さんの療育業務を継続できているということを忘れてはいけません。
幼児期の〝ことばの学び〟は人格の土台をかたちづくります。お子さんに〝言葉を教える〟ということは〝人間形成の基礎〟を教えるということです。その道にふさわしい姿勢や心構えをもち、技術を高めていくことが求められます。
では保護者様との信頼関係を築くためには具体的に、どの様なことを心がければ良いでしょうか？詳しくみていきましょう。

まずは、とある事業所での『ことばのトレーニング』後の保護者面談の様子を見てみましょう



例１
（ことばのトレーニングを終えて）

先生、ありがとうございました。
うちの子、集中力がなかなか続かなくて・・・ご迷惑をおかけしました。
以前は、話せていなかったことが話せるようになっていて、びっくりしました。これからも・・



（話を遮り）そうですね。話すことの出来る単語が、増えていますね。
でも、みつる君、なかなか集中力が続かないですね。

すみません。
今日の先生のトレーニングの中で、〝食べる〟とか〝飲む〟のような言葉を話す課題がありましたが、あれらの課題はどのような意味合いがあるのでしょうか？



あれは動作語のトレーニング課題になります。
みつるさんは、話せる単語が、増えてきていますが、物や人を表すことば〝名詞〟が中心で〝動作語〟が話せていないので、普通よりも遅れています。

そうですか・・・やっぱり遅れているということですね・・



はい。普通は２歳前後で〝動作語〟が話せるようになります。

そうなのですね。まだお医者さんに診てもらっていないのですが、そんなに言葉が遅れているということはやはり発達障害なのでしょうか？



はい。発達障害の疑いがあります。自閉症の可能性が高いです。

この【例１】の会話例において、ことばの先生が、改善すべき点が、いくつ挙げられるでしょうか？

その答えについては、後ほど確認するとして、まずは保護者対応で気をつけるべきポイントについて、詳しくみていきましょう。

保護者対応において重要なポイントとして、
以下の４点が挙げられます。

1 基本的に聞き役に徹する

2 言葉を慎重に選ぶ

3 保護者が理解できる言葉を使って説明する

4 整理して伝える

それぞれについて詳しくみていきましょう

1 基本的に聞き役に徹する

保護者様は、それぞれに様々な思いを持って事業所に来所されます。お子さんの言語面の問題は、園生活や、家庭生活、学習などあらゆる状況で顕著にあらわれます。幼児さんと保護者様との意思疎通の難しさは通常の子育てでも起こりうることではあります。しかし、親子同士のコミュニケーション手段の大きな割合を占める〝話し言葉〟について、困難さが長引いてしまうと、保護者様のストレスは大きく膨らんでいくことがあります。そのような日々において、将来に対する不安や　憤りは計り知ることができません。

初回面談で保護者様が望むことは、まず第一に、今の思いや考えを誰かに聞いて欲しいということです。そのため、言葉の先生は、保護者様の話すことを遮らずにまずは、どんな些細なお悩みでも、全て話し終えるまで、聞いてください。聞くことで言葉の先生は、保護者様の悩みや思い、ことばのトレーニングへの疑問・期待などを把握することができますし、保護者様は、先生に話を聞いてもらうことで、（聞いてもらった瞬間は）心の重荷をいったんは、下ろすことができます。

聞き役に徹することは大切ですが、傾聴の姿勢を心がけながらも、基本的には、ことばの先生が保護者様をリードして面談を進めなければいけません。このバランスが難しいのですが、話しやすい環境をこちら側（ことばの先生側）が作りながら、時には、アドバイスや助言を述べて、話の結末までの道筋は、先生がリードしていくということです。
面談において、特に保護者の目に留まるポイントとして『①話す内容』『②聞く姿勢・態度』の２つが挙げられます。『話す内容』に関してはあとで述べるとして、『聞く姿勢・態度』において重要なのは、保護者様が話すたびに「確かに、そうですね」という〝相槌〟をうつことです。話し手の気持ちや思いに反応して「そうですね、わかります」という〝共感の相槌〟をすると、話し手は自分の思いを真剣に聴いてもらえている。自分は受け入れられているということを実感します。

2 言葉を慎重に選ぶ

突然ですが、下の文章を聞いて、みなさんはどのように受け取りますか？

「いつも 忙しそうですね」

この文章を聞いて、ある人は〝いつも忙しそうですね。毎日仕事が充実していそうで、うらやましいです〟というポジティブな意味合いで捉えたかもしれません。

また別の人は〝いつも忙しいそうですね。私はそんなふうに、たくさん働きたくはないです〟というふうにネガティブな意味合いで捉えるかもしれません。

このように、同じ言葉を聞いても、聞き手側、それぞれに解釈の仕方が異なるわけです。現場の先生が、何気なく放った一言が、保護者様のプレッシャーや不安につながる可能性があります。話し手側（先生側）に、全くそのようなつもりはなかったとしても、聞き手（保護者）からすると、グサリと胸につきささり、帰宅後も考え込んでしまうほどネガティブな影響を及ぼしてしまうということがあります。ですから、言葉の使い方には慎重にならなければなりません。そのことを常に頭におきながら、保護者様と接していきましょう。

今、みなさんには、この『ことばの先生』の資格取得プログラムを学んでいただいているわけですが、この資格プログラムでは、言語臨床でのエビデンス（科学的根拠）をベースに言語聴覚士中野が作成したトレーニングカリキュラム紹介させていただいています。しかし、残念ながら、このプログラムをマニュアル通りに実施したとしても、すべてのお子さんに無条件に劇的な効果が表れるわけではありません。我々が行う機能訓練における改善には限界がありますので、目に見える成果が表れにくいお子様もおられるでしょう。そのような場合でも、我々、療育者には、お子さんの状況・評価の結果を保護者様に伝える義務があります。時には、ネガティブな内容（〇〇ができていない、△△が話せていない、集中できていない。など）を伝えなければならない場面もあります。

そんな時でも、言い回しを少し変えるだけで保護者様が受ける印象は随分と変わります。

以下に、ネガティブな情報を保護者様に伝える際の、言い回しの例を載せておきました。

参考にしていただければ幸いです。

× ～ができていない ⟶ 〇 ～が現時点では難しい
× ～が遅れています ⟶ 〇 ～がゆっくりです
× 集中できていない ⟶ 〇 集中力の持続が難しい
× 普通は３歳で言えます ⟶ 〇 ３歳前後で、言えるようになるお子さんが多いです
× 絶対に～です ⟶ 〇 一般的には～といわれています
× 言葉は治ります ⟶ 〇 今後、言語面が成長していく（伸びていく）可能性があります

その他、気をつけること

・「障害は治ります。」という主旨の発言をしてはいけません。

障害とは『病気』ではなく『極端な個性』です。そもそも根本的に治るというようなものではありません。みなさんは障害そのものにアプローチするのではなく、お子さんの言語面の成長を促すためトレーニングを行なっていきます。

・障害の診断に関わることについて言及してはいけません。

診断に関して言及できるのは医師だけです。

3 保護者が理解できる言葉を使って説明する

どの業界でも職員同士のやりとりにおいて、その業界独自の専門用語を共有しています。専門用語を使うことにより、伝えるべき事項を省略できるので、使い方によっては専門用語の使用で仕事の効率が上がります。しかし、それが習慣化してしまうと、ついつい、その分野に詳しくない人に対しても、自然に専門用語を多用してしまいがちです。我々言語聴覚士の世界でも、現場では専門用語が飛び交っています。医師や、看護師、理学療法士などスタッフ内で、患者さんのカルテを共有し、意思疎通を図ろうとすると、専門用語を使わざるを得ません。しかし保護者様との会話の中で、専門用語を多用することは控えた方が賢明です。保護者様の立場からすると、わからないことは不安につながりますし、先生と生徒の親という関係性の中で、自分から、聞き出しにくいということもあります。ですから、出来るだけ専門的な用語は使わずに、噛み砕いた表現で、保護者様に伝えることが大切です。素人でもわかるくらい噛み砕いた表現を用いることが良いでしょう。

さて、私はこのテキストを作成する際、できる限り専門用語を使用しないよう心がけています。それでも、皆さんにビデオで講義させていただく上で使わざるを得ない専門的なワードもあります。例えば『表出』などということばは、言語聴覚士が、よく使う専門用語の一つです。『表出』とは『ことばを声に出して話すこと』ですが、保護者様の前でこの『表出』ということばを使っても、その意味やニュアンスが理解していただけないこともあります。ですから、保護者様の前では『表出が～です。』ではなく、『言葉として話すことが～です。』のように伝えるようにしています。

4 整理して伝える

皆さんが、旅行先で一人歩いていたとき道に迷ってしまったとします。初めて来る場所で、知り合いもいない…困り果てていると、地元の人が通りかかったので、ホテルまでの道のりを尋ねました。そうすると、このような返答がかえってきました。「まず、この道をまっすぐ行ってください。そうすると郵便局が見えます。郵便局が見えたら左に曲がってください。そこから直進して、２つ目の信号を右に曲がってください。そこから４つ目の建物が〇〇ホテルです」

どうでしょうか。理解しやすかったでしょうか。これを聞いただけで、目的地にたどり着けそうですか？

地元の人は、近辺の地理を把握しているので、流暢にホテルまでのルートを説明しました。しかしながら、皆さんはこの街に初めてきたわけですから、文章だけを聞いて理解して記憶して、その記憶をもとに、ホテルまで戻ることは、結構な労力を必要とします。もちろん。なんの問題もなくたどり着ける人も沢山いるとは思いますが、言葉だけで説明を受けても、分かりにくいことは明らかです。

これと同じことが療育の現場でもよくあります。保護者様は、（大抵は）療育の専門家ではありませんので、ことばの成長や発音について何もわからない状態です。誰しも、わからないことには不安を抱くものです。
ですから、少し複雑な内容を保護者様に伝えなければいけない場合、図やグラフなどの視覚情報を用いて説明することをお勧めします。視覚に訴えれば、説明は簡潔かつ、わかりやすくなります。上の道案内の例でも、もし地図があれば、安心して道を進んでいけますよね。

言語面の難しさを持つお子さんの保護者様は、我が子の"言葉の遅れ”への解決策を求めています。それに対し、こちらから"言葉の遅れ”の背景にある言葉の成長の特性を説明し、評価の結果を保護者様に、わかりやすく伝える必要があります。その際に地図となるものすなわち視覚的な情報があるほうが、わかりやすく、具体的に解説することができます。

このテキストには、言葉の成長や、発音の成長に関する図、表をいくつか記載させていただきました。それらをそのまま使用して（保護者様に見せて）説明していくということも良いと思います。もちろん、現場の先生方が、アレンジした図や表を使用することも、とても良いと思います。実際に図や表を使ってみると、案外すんなりと、保護者様に理解していただけることもあります。

他にも、私が保護者懇談の際に心がけているのが、項目分けをして話すことです。項目分けとは、つまり、思いついたことを長々と話すのではなく、お伝えしたいことをわかりやすく整理して話すということです。

普段から私は赤・青・黒の３色の色ペンと、リングノートを常に持ち歩いています。
保護者様や、学生、新人言語聴覚士に『言葉の成長』や、『発音』に関する説明を求められた時、ただ言葉で話して説明するのではなく、伝えたい内容を項目別に色分けしてリングノートに書き込み、そのノートをみせながら「１つ目は～　２つ目は～　これらの理由で～であると考えています。」のように伝えます。このように項目別に整理、視覚化して伝えることで説明にかかる時間を半分に抑えることができます。工夫ひとつで、聞き手側の理解度が驚くほど上がります。

では、これらのことを踏まえて【例２】の面談の様子をみてみましょう。

例２
（ことばのトレーニングを終えて）

先生、ありがとうございました。
うちの子、集中力がなかなか続かなくて・・・ご迷惑をおかけしました。
以前は話せていなかったことが話せるようになっていて、びっくりしました。
これからも、よろしくお願いします。





いいえ。お母さん。みつるさんの頑張りの成果ですよ!!
こちらこそ。引き続きよろしくお願い致します。
そうですね。お母さんのおっしゃる通りで、みつるさん、随分と話せる単語の数が増えてきました。たくさんお話ししてくれますので、コミュニケーションが取りやすくなりましたね。私も嬉しく思います。たしかに、現段階では集中力を維持することが難しいこともありますが、継続は力なりです。集中できるようにトレーニングを続けていきましょう。

ありがとうございます。
今日の先生のトレーニングの中で〝食べる〟とか〝飲む〟のような言葉を話す課題がありましたが、あれらの課題には、どのような意味合いがあるのでしょうか？





あの課題では、『動作を表す言葉』を学んでいただいています。『動作を表す言葉』として挙げられるのが、例えば〝食べる〟とか〝寝る〟〝泣く〟〝飲む〟〝書く〟などです。（ことばの成長の図を見せながら）みつるさんは、今、話せる単語が増えている時期ですが、現段階では「おさかな」「くるま」「せんせい」など物や人を表す言葉である『名詞』が中心です。ですから、さらに話せる単語のバリエーションを増やすために、『動作を表す語』に関するトレーニングを実施させていただいています。この『動作を表す言葉』を話せるようになると、少しずつ文章で話せる事が増えてきます。

そうですか。今のみつるにとって『動作を表す言葉』を学ぶことが大切な理由がわかりました。みつるのお兄ちゃんはもっと早くに話せていたと思うのですが・・・みつるの言葉はやはり随分、遅れていますよね？





（ことばの成長の図を見せながら）一般的に動作語が話せるようになるのは２歳ごろです。ただ、この時期のお子さんの言葉の成長には個人差が大きいものです。ですから着実に成長できるように、みつるさんのペースで無理をせずにトレーニングを続けていきましょう。

わかりました。まだお医者さんに診てもらっていないのですが、言葉が遅れているということはやはり、みつるは発達障害なのでしょうか？





申し訳ございません。障害の診断名について、判断できるのはお医者さんですので、私が判断することができません。発達外来など専門医に１度受診されるというのも一つの選択肢であると思います。

どうでしょうか？
例２では、ことばの先生の印象が随分と良くなりましたね。

このように、同じ内容を伝えたとしても伝え方を工夫するだけで、保護者様の受け取り方や、反応が変わります。皆さんはこれから、お子さんとの『ことばのトレーニング』と併行して、保護者対応を進めていきます。その過程で、様々な思いを抱えた保護者様の相談にのる機会が出て来るかと思います。その際に大切なのは悩みを持つ保護者様に寄り添いながら、一緒にお子さんの成長を見守り、真摯に解決策を考えていく姿勢です。保護者様は、先生をみて我が子の療育先を決めるのです。

このような場合は専門医・専門機関を推奨します。

❶ 後天的な脳機能障害（外傷、病変）を原因として言葉や発音が遅れている。
・後天性小児失語症など

❷ 麻痺を原因とする言葉や発音の遅れが確認できる。
・脳性麻痺など

❸ 聴覚障害を原因とする言葉の遅れが確認できる。

❹ 口の中の形状を原因とする発音の遅れが確認できる。
・器質性構音障害など

❺ その他
・著しく、落ち着きがなく、トレーニングを進める上で怪我をしてしまう可能性がある。
・トレーニング①の段階から、１年以上、同一のトレーニングを繰り返しても、
トレーニング①をクリアできずにトレーニング②にステップアップすることができない。
（重度の知的障害のお子様は、言語を話すことを目標とするよりも、専門の医療機関で代替コミュニケーションの使用を目標とするトレーニング（AAC・補助代替コミュニケーションの習得）を勧めた方が良い場合もあります。）